



Title	シンポジウム「儒教と二十一世紀と」によせて
Author(s)	河田, 恒一
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シンポジウム「儒教と二十一世紀と」によせて

河田悌一

プロフィール

河田悌一 関西大学文学部（中国思想史）教授。一九四五（昭和二十）年、京都市生まれ。大阪外国语大学卒業。和歌山大学助教授をへて、八六年より現職。その間、八〇年から一年間、イエール大学客員研究員。九年から一年間、プリンストン大学客員研究員。硬直したイデオロギー的分析を乗り越え、伝統的中国学の学殖を武器にしたその中国近代思想研究は、学界の注目するところである。著書に『中国近代思想と現代』、主要論文に「現代中国と孔子」、「伝統から近代への模索——梁漱溟と毛沢東」など。

歐米の歴史は、キリスト教と切つても切れぬものとして存在する。それと同じように、中国、朝鮮半島、日本など東アジア地域の国々にの歴史は、儒教をぬきにしては語れないだろう。

そろいもそろつて儒教を文化の土壤としてもつてゐることに、注目があつまつてゐる。

それは最初、一部の欧米に住む中国（系）学者が、キリスト教世界において自からのアイデンティティを鼓吹する、ひとつの主張にすぎなかつた。しかし世界的規模での社会主義体制の崩壊現象、いわゆる”歴史

の終わり“のなかで、儒教を見直そうとする動きは、より強いものになつてきている。なにもそれは、”四つの小龍“と呼ばれる台湾、韓国、香港、シンガポールにおいてだけではない。大陸の社会主義中国、さらにはベトナムでも然りなのである。

では、儒教は果たして、二十世紀もあと残りすくなくなつた現在の時点において、価値をもつものなのであるうか。そして来たる「十一世紀の東アジアで（また世界のなかで）、価値をもちづけるものなのであるか。さらにひと口に儒教といわれるものの内実は、どうなのか。——儒教とは何か？

今回のシンポジウム、題して「儒教と「十一世紀」と」において、われわれが問題にせんとするところは、まさにそうした点にある。

もちろんこのような大問題にたいして、ただちに解答をだすことは、容易なことではない。しかし、すぐれた知性の発言によつて、その解答への示唆をうるることは、可能なのではなかろうか。

そこで今回は、島田虔次・陳舜臣の両碩学をゲスト・スピーカーにお招きし、またその講演にたいする討論

者として、学界の指導的研究者から佐藤慎一、井波律子両氏をむかえ、ご参加の方がたともども「儒教」について考えてみたい。

まず長年にわたつて中国、日本、ベトナムなどの思想史研究をなさつてこられた島田虔次氏には、儒教の「積極的意味」について歴史的考察を加えていただき、そのご主張にたいして欧米の中国研究にくわしい佐藤慎一氏から、ご意見をだしていただく。

ついで中国をテーマに数々の傑作を書いてこられた陳舜臣氏には、文学者、歴史家としての独自の観点から、さらに中国人としての生活感情から、氏の考え方じておられる儒教について論じていただく。そのあと、陳氏のご主張にたいして、最近ユニークな書物を次つぎに上梓しておられる井波律子氏からご意見をだしていただく。それらをもとにして討論をすすめたくおもう。

と同時に、会場の参加者の皆さまからもご意見、ご質問を頂戴して、穏りゆたかなシンポジウムにしたい、とおもつてゐる。